

♪エディットピアフ「アコーディオン弾き」その3(承前)♪

今回は1番の歌詞のクープレを紹介しました。今回は続いて1番のルフランです。音楽の悦びが官能的に歌われています。官能の悦びが音楽になぞらえて歌われているとも言えます。(ここから引用)

彼女はジャヴァを聴く
でもジャヴァを踊らない
ダンスフロアにも目もくれない
彼女は恋する瞳で
力強いプレイから目を離せない
ステージの男のがさがさした長い指は
彼女に入ってくる 肌で知っている
下のほうを 上のほうを
歌いだしたい
軀(からだ)で感じる
全身が張りつめる
呼吸が止まる
彼女は音楽に芯から身悶える (引用ここまで)



絵 藤森悠二 作

1947年生 東京都出身

洋画家

「関東アコーディオン演奏交流会

2006アコーディオンのある風景」より

サンマルタン運河

©画像の複写・転写を禁止します。

《ジャヴァ・ミュゼット・ヴァルス(ワルツ)・バル》

フランス語ではダンスホールは「バル」。19世紀末パリ」のダンスホールではフランス中部オーヴェルニュ地方のバグパイプが演奏されていました。コルヌミューズとかミュゼットと呼ばれる楽器です。飲んで踊って音楽が聞ける店も「バル・ア・ラ・ミュゼット(ミュゼットのあるバル)」になり、その音楽がミュゼット音楽というジャンルになりました。

そのうちにイタリア系の人たちが持ち込んだアコーディオンがダンスホールを席卷します。20世紀の初めです。おそらくはこれもイタリアから持ち込まれたマズルカをもとにしたワルツが「バル・ミュゼット(ミュゼット音楽のバル)」の主演になりますが、テンポが速く1拍目が強いのが特徴です。これがジャヴァです。ダンスも男女で体をぴったりくっつけて激しく踊るスタイルが流行します。

実際にはバル・ミュゼットではスペイン風のパソ・ドブレやタンゴ、ポルカ、ウィンナワルツ、マディソンと多種多様なダンス音楽が演奏され、歌手も登場しました。それらは全てミュゼット音楽なので、「ビヤ樽ポルカ」(フランス人も大好きでフランス語の歌詞があります)も広い意味ではミュゼット音楽です。

そうは言っても中心になるのはジャヴァを筆頭に圧倒的にワルツ系で、特にジャヴァよりもリズムが軽い「ヴァルス・ミュゼット(ミュゼット・ワルツ)」が多く、一般にはミュゼットといえぱヴァルス・ミュゼットになります。前回取り上げた「パリの空の下」はヴァルス・ミュゼットです。

バル・ミュゼットとヴァルス・ミュゼット、そしてアコーディオンの黄金時代は両大戦間から1960年ごろまでで、その後はロックンロール、テレビ、ロック、ディスコに大衆の娯楽の王座は奪われてしまいます。「アコーディオン弾き」はアコーディオンとミュゼットが輝いていた時代のまっただ中に作られ歌われたシャンソンです。(以下次号)